

イタリア人から見た日本

スイス銀行東京支店長

ヴィットリオ・ヴォルピ

聞き手：佐多彦彦 株式会社東機質代表取締役社長

佐多：ご著書の『日本よ敵か味方かーイタリア人の見たニッポン』（日本経済評論社）では、経済問題を中心に、90年代の日本社会への積極的な提言がなされています。ヴォルピ：もともとこの本はイタリア人に、日本と日本人を説明したいという動機で出版しました。イタリア人は日本について、ホンダ、ソニー、カワバタ、ミシマ程度の知識しかありません。日本経済の実態を歴史的制度的に分析解明して、理解と関心をもってもらおうとしたのです。「敵か味方か」といっても、日本はもちろん味方ですけど、上手に交際していくことはなかなか困難です。

佐多：確かにイタリアと日本では文化的な違いが大きいですね。

ヴォルピ：ローマの歴史家タキトゥスは、文化が変わるには何世紀もかかると言っています。私はいま、織田信長時代のイタリア人、ジョヴァンニ・ヴァリニャーノの研究をしているのですが、彼の著作の中でタキトゥスの言葉を再認識しています。

バリニャーノはポルトガルでイエズス会に入りゴアやマカオに住んでいたのですが、極東担当として、1578年に日本に来ました。彼はまず宣教師たちに、2年間で日本語をマスターする指示をしています。言葉が通じなければ、信者とのコミュニケーションができません。告白も受けられませんね。次にマーケット・ポジションの提起をします。フランシスコ会のように貧しい人々を中心に伝道するのではなく、大名をターゲットにすべきことを勧めています。それは日本がタテ（縦）社会だからです。大名が説得できれば、家臣をはじめ藩の多くの人々がキリシタンになることを見抜いていました。彼が来てから20年で、キリスト教信者が30万人程に増えています。その他、日本の社会でどのように振る舞うべきか、日本人とどのように付き合うべきかについて、膨大なメモを残しています。それは今も十分通用する。抜群です。



ヴィットリオ・ヴォルピ

Vittorio Volpi

1939年イタリア・ミラノ生まれ。72年、イタリア商業銀行日本支店開設のため来日。支店長として9年間勤めた後、81年、同行退社と同時に国際ビジネスコンサルタント会社・(株)パラレル設立。現在、スイス銀行東京支店長。上智大学講師。著書に『経済大国ニッポンに明日はあるのか』、『日本よ敵か味方か』など。帯日24年の知日家。イタリアでは日本問題の解説者として著名。

彼のジャパニーズ・メモを読むと、織田信長の時代から日本人の基本的なスタンスは変わっていないことが判ります。安全な共同社会、オンとギリの集団意識、外国人に対し非常に丁寧で敵対的でないこと、そして大変に好奇心が強いこと。バリニャーノは日本人の好奇心について書き残しています。世界のことは何でも知りたい人々、と。

佐多：それはいまでもですか？

ヴォルピ：いまでもです。実にcurious（好奇心旺盛）な方々です（笑）。イタリア人も、何世紀も変わっていません。例えば、イタリア人は政府を信じていません。歴史的にイタリアの政府は信頼に値しないからです（苦笑）。それは父から子へと伝わります。またイタリア人は外国人が好きです。それも伝統です。ローマ時代衰退期から、いわゆるバルバロイが沢山入り込みました。北欧から、ドイツから、英国から……。一般的なイタリア人は外国人に対し、いらっしやい、いらっしやいという基本姿勢を崩しません。

佐多：なるほど。ところで国際社会での日本の立場は、いま、非常に難しいところに来ています。ある意味で文化的アイデンティティが問われていると思うのですが。

ヴォルピ：日本の生活様式はどんどん西洋化しています。しかし文化的な中核は変化を受け入れないですね。

VITALITE

インタビュー



国際化、国際化と言われていますが、言葉だけで、実際は何もしないのではありませんか？我々としては、本当に国際化して欲しいですよ。日本がよりグローバルな存在になるためには、もっとマーケットを解放しなければなりません。日本人の考え方がオープンになり、大学も外国人教授をもっと受け入れ、外国人学生に開かれたものにならないと文化は変わりませんね。

世界的なブレン、知恵や経験が集合し交換することの本当のメリットは、切磋琢磨することによって相互に強くなり進歩することです。それなしに日本がアメリカと肩をならべることはないでしょうね。世界で重要な地位に立ち、第二位にはつけても。

佐多：日本が世界のリーダーになることはない、と？

ヴォルピ：いくら経済や金融の力が強くても、はっきり言って無理でしょうね。それはグローバル・ビューがないからなのですね。日本人はしばしばあまりにも些細なことに気を奪われています。戦略的課題にとりくむ時には、先見の明がないと失敗します。

佐多：日本のシステムは人を幸せにしないと、オランダ人ジャーナリストのウルフレン氏が痛烈な批判をされていますね。

ヴォルピ：しかし、夜のバーや飲み屋さんではハッピーな人をたくさん見かけますよ（笑）。

新聞記者をしている妻と昨夜も話したのですが、彼女は日本人が非常に不幸だと言います。例えば日本人は会社第一主義で、休日も接待ゴルフで、妻はゴルフ未亡人です。イタリア人なら離婚ですね。家庭を大事にするからです。しかしこれは文化の違いです。違うから駄目、

となるとこれは、カルチャー・レイシズム（差別主義）ですね（笑）。非常にアブナイと思いますよ。確かに多くの西欧人は日本人が不幸だと言います。しかし異なる文化の中で成長した者は、簡単には判断できないと思うのです。私は日本人は「相対的に」幸せだと思いますよ。

日本の文化は素晴らしい。文化は美です。違いがあることは美しいことです。常に互いの文化を尊重しあい、寛大であることが世界市民の第一歩です。“郷に入りては郷に従え”ですよ。

佐多：日本が変わるには外圧が必要という意見も多いですが。

ヴォルピ：「黒船」による外圧は、あるいはいまでも有効かもしれません。

しかし、日本は実にコントラストに満ちた国で、良き世界市民というべき経済人もいるのです。我々ヨーロッパとしても、日本を知り、日本人と適切な対話を行えるように努力する必要があります。日本人の「ホンネ」と「タテマエ」、すなわち現実と口実（ノ）を区別し、日本人がいわゆる“（鎖国的な）日本人であること”を超越していく姿勢をもつならば、その姿を大きな関心をもって見守り、勉強すべきです。

佐多：具体的に、10年、15年後の日本はどうなっているとお考えですか。

ヴォルピ：ますます西欧化が進み、価値観もじょじょに集団主義、会社第一主義から個人主義になっていくと思います。失業率も今は3%くらいですが、5~6%くらいになって、貧富の差が拡大し、犯罪も増えていくのではないのでしょうか。円安も、1ドル150円程度になるんじゃないかと思います。

佐多：それで日本はやって行けますか。

ヴォルピ：やって行けるんじゃないですか。かつて円高で1ドル80円になったとき、日本は倒産すると言われてました。しかし、今年上場している会社は純利益が15%ですよ。日本人ほど柔軟性のある人々はいません。外から見るとかなり堅牢なようですが、実は非常に实际的で柔軟です。日本人は知らないことについては弱いのですが、問題が明らかになった時、すごくefficient（有効）な結論を出します。そして結論を出してからは非常に有能ですね。ですから、時間があればたいいのことはうまくやっていけると思います。

科学的医療と倫理 新しい科学者像を求めて



村上陽一郎

むらかみ・よういちろう

1936年、東京生まれ。東京大学教養学部卒業、同大学院人文科学研究所博士課程修了。東京大学先端科学技術研究センター教授、同センター長を経て、現在、国際基督教大学教授。著書に、『近代科学を超えて』『近代科学と聖俗革命』『生と死への眼差し』『科学者とは何か』など多数。

され、父がそのさなかに亡くなったこともあって、シニカルに言えば、体力のない僕には学問の世界で生きていくのがせいぜいだったのです（苦笑）。

医療をする側とされる側の間には、ときに考え方のへだたりがあるようです。

村上：そうですね。医者にとっては、治療をしようとする患者さん個人は、やはり one of them です。それは、文字どおり多数の患者の中の一人であるという意味ですが、そればかりでなく、統計データに頼るという意味でもあります。それは科学技術の姿でもあります。例えばワクチンの強制接種の考え方は、過敏に反応する特異体質の人の被害より感染による犠牲者のほうが割合としてはるかに高いという統計に基づいています。ところが患者の側からいうと、自分は統計の中の一例ではない。患者の家族にとってもかけがえのないユニークな一人ですから、データでは納得できません。このように、医療の側と患者の側との間には宿命的に違う論理が働く現場であるということがいえるでしょうね。

科学的医療は、モノのふるまいとして現象をとらえ、それでかなりの問題を解決し、多くの生命を救ってきました。人間の身体をモノと見立て、その中に故障があれば修理する、さもなくば部品を取り替えてやる、そのやり方は、言葉は悪いが、ガレーズマンと同じですね。それだけではどうしても解決しないで、もし心身症という診断を下すすれば、これはもう、あなたの病気には科学的医療はお手上げですよと言っていることでしょう。

医学医療の進歩が手放しで善である、という考えに影がさしている。とりわけ、遺伝子治療や臓器移植、体外受精、尊厳死などの問題をめぐって“科学技術は諸刃の剣”というような言葉が使われるのは、たんに医療技術の急速な進歩に社会制度や人々の心がついていけないためばかりではないようだ。

しかしいま求められることは、科学技術とは何なのかという問いを追及するとともに、これをいかにコントロールするかという課題に答えていくことだと思われる。この問題について、科学史・科学哲学の立場から、国際基督教大学の村上陽一郎教授に、うかがった。

先生はかつて、医師になろうとお考えだったそうですね。

村上：父が医者でしたので、少年時代は漠然とそう思いました。でも高校2年から3年間の療養生活を余儀なく

痛みや苦しみは、その人でなければ分からない、かなり主観的なものですね。

村上：これはある女性の実話です。患者は七転八倒して痛みを訴えるのだが、医者としては病理学的にみても、現在可能なありとあらゆる診断方法をとってみても、どうしてもそんなにひどい痛みが起こるとは考えられない。仕方なく開けて調べてみるが、神経にもどこにも異常がない。結局なにもしないので閉める。すると患者は一時的にはケロッとしているが、やがてまた痛む。こんなことを繰り返していると、だんだん医者が患者を相手にしなくなる。この患者はわがままで、医者に痛みを訴えていないと安心できない。痛みはその性格のゆがみからくるんだという診断を下されたと本に書いておられます。

しかし、たとえ科学的にはやることがないとしても、患者さんが苦しみを訴えている以上、なんとかしてそれを取り除いてやる、あるいは苦しみとともに生きて行く方法を一緒に探してあげる、というようなことも当然医者の仕事だと思います。けれども、科学的な医療であればあるほど、このようなことができなくなっていくでしょうね。

いま、医学はどんどん細分化され、科学的な専門医が増えているようです。

村上：それは大きな問題です。通常、偉い医者といいますと何々大学医学部付属病院の教授というふうに考えられていますね。しかしその立場は、患者さんを何人救ったかというようなことではなく、主に研究論文が何本あるかで決まるのです。科学者というのは結局、論文を書く人ですから、医者が科学者として成立していくということは、医者が論文書きとして成立していくことに近づいていくことになりますね。私はそのあたりが、ちょっとおかしいんじゃないかと思っているのですが、最近では、看護婦さんもその傾向にあるようです。

看護婦さんがですか？

村上：いま、看護学校が短大になり、短大が四年制になり、看護大学に大学院が置かれるという圧倒的な波が来ています。ここで求められる教員がまた、看護の現場で実績をあげただけではだめで、研究論文を書いているか、学会で研究発表をしているかで決められるんですね。論文を書くことは“科学のしきたり”ですが、医学の世界に科学のしきたりが入り込んで、よい論文書きがよい医者という誤解が出て来る。それはよい医学者であるかもしれないが、よい医者かどうか分かりません。看護

婦さんも、よい看護学者がよい看護婦さんであるかどうか、そしてよい看護婦さんを育てられるかどうかは分かりませんね。

科学が中身としてもっている限界のほかに、制度的な問題があるわけですね。ところで、論文を書いて科学を進歩させる科学者というと、子供のようにナイーブで寝食を忘れて研究に没頭する姿が目に見えます。

村上：子供のように純真で、研究がひたすらおもしろい、わかりたい一心という、その姿勢や態度が結果的に原子爆弾を生んでいった歴史を考えると、必ずしもそれを善しとすることはできません。子供のようにおもしろがっている人は、子供のように無責任といっているいいでしょう。僕はただおもしろいから原子核の研究をしたのだ。広島、長崎に責任があるのは、それを利用して勝手に原爆を作った政治家や軍人だと、こういう言い方で責任を回避してきた科学者たちがいたのですから。

先生は『科学者とは何か』（筑摩書房）のなかで、閉鎖的な専門家集団がもたらす弊害を強く指摘されていますね。

村上：ええ。そこにも書いたんですが、当時の物理学者のなかにも、世界情勢や軍事などへの深い洞察をもって行動した人物がいます。例えばレオ・シラードという米国に亡命したハンガリー人です。

この人は原子核の研究のかなり初期の段階から、これを進めていくと原子爆弾ができる、今の戦争状態では恐らく使われるかも知れないと考えました。しかも、まだ1943年ごろに、第二次世界大戦が終わったら、今度は米ソ対立のなかで核兵器の開発競争がおこるだろう。だから、いま止めておかなかったら大変なことがおこるだろうと、そこまで読んでいたのです。ですからシラードは、それこそ死にもの狂いで、何とかして原爆を止めようとした。1945年3月25日付ローズヴェルト大統領宛のシラードが起草した書簡には、原爆使用反対の科学者たちの訴えが書かれています。アインシュタインの署名もあります。「恐らく我が国が直面する最大の危険は、われわれの原子爆弾の“示威”行為が、アメリカとソビエトとの間にその種の兵器の製造競争をほぼ確実に誘発することにあります」と。そして、だから核兵器に対する厳密な国際管理が唯一の進むべき途であり、しかも、アメリカが伝えられるように無警告に対日戦争に使用すれば、今後

の核兵器の国際管理について国際世論を形成していくのに決定的に不利になる、と警告しています。しかしこの書簡は結局ローズヴェルトの死によって、日の目をみず、トルーマンは軍部の説明だけを聞いて了解したわけですね。

これはまさに悲劇だったのですが、我々としては、このシラードのような人がいたということは忘れることができません。

シラードは原子核について非常によい研究をしているにもかかわらず、ノーベル賞受賞者にはなりませんでした。一方「マンハッタン計画」に参画して、原爆の開発に邁進したオッペンハイマーやファインマンらはノーベル物理学賞を得ています。

シラードはノーベル賞をとることもできたのだが、あえて原爆につながるような研究を進めなかったのですね。

村上：ノーベル賞についていえば、今はもう、益よりは害のほうがはるかに大きいと私は断言します。ノーベル賞をとるためにどれだけ科学者がスポイルされているか、つまり彼らが何とかして他人を出し抜いて自分だけが新しい成果にたどりつき、うまく独占して発表にもっていくかという競争場裏の中で、どれだけすさまじい戦いを繰り広げているか、また、それができそうな人でなければ国際競争で頭角をあらわすことができなくなっているか。このような傾向は、新しい学問である分子生物学あたりから特に顕著になっています。

DNA研究では、受精卵への応用は禁止されていますね。

村上：ええ。それも人間には禁じられていますが、他の生物ではかなり大胆なことが行われています。いま農学が人気なのも、生命科学の最先端の研究ができるからです。早いもの勝ちというような。

もちろん生命科学のなかでも、ハーバート・ボイヤーとか、ポール・バーグ、スタンリー・コーエンら数人が、制限酵素でDNAを切り貼りする技術ができかけていた段階で、このままほっておいたらどこまで遺伝子をいじくってしまうかわからない、だからある程度、自分たちで手かせ足かせを考えようと言いつつ出したという実例があります。これが1975年のアシロマ会議ですが、これは非常に画期的なことでした。「組み替えDNAの断片を増殖させるという実験は予測のつかない性質をもった新しい病原微生物

を造り出す可能性がある」「それらに含まれる危険について十分な評価が確立し、かつ危険防護の適切な手段が開発されるまでは実験を凍結」しようというモトラリウムの取り決めです。この提案に対して、後発の科学者は反対しましたが、ある弁護士が、もしこの研究によって何かひどい被害が出た場合に、どれだけの賠償をしなければならなくなるかの計算をしてみせたので、ようやく申し合わせができました。

ところが可笑しいのは、その後に生れたガイドラインをNIH（米国衛生研究所）が実践しようとしたとき、十数人の同業者がスイスなどに逃げたんですね。まだ手かせ足かせができていない国でやりたいことをやって、はやくノーベル賞にありつこうというわけです。

そのあたりはスポーツ感覚というのでしょうか。第三者機関の役割が問われますね。

村上：ですから、私たちは科学者の良識なるものに期待できる部分もあるが、全面的にはまかせられないだろうと。だからやや迂遠ではあるが、そもそも科学者が自分たちの密室のなかだけでやっていること自体がおかしいのだから、いわば専門家以外の人達がそれを論じたり、専門家に対して要求を出したりするチャンネルを社会的な制度としていくつか作っていくべきだと思います。

その一つが、いまある倫理委員会なわけですね。日本の倫理委員会は、これが実に日本的で、自分たちのお手盛りでやってしまう、本当に機能しているのかかなり怪しげなんだけれども、それでも、やはりやっていくべきだと僕は思います。できれば、科学者以外の人50%程度をしめ、法律家や倫理学者、ジャーナリストなどを含む、一般市民が議論できるようにしていくいいのですが。

一般の人が理解していくのは大変です。

村上：しかし、科学者の共同体がもっとオープンになることが絶対に必要だと同時に、一般市民もそこで何が起きているかをよく理解して、判断に参加していかなければならないでしょうね。普通の人々が直観で、何となくイヤだなというのも、もしかすると大事なことになる場合もあり得るのです。

科学者も、そこだけしか解らないというのが今の姿だけれども、やっぱりそれでは危ないと思いますよ。自分の専門領域外のところにも心配りができ、いろいろな知識をもって、先のことが考えられる、レオ・シラードのような人が増えていった欲しいと思います。

NEW TECHNOLOGY

ラリングエルマスクを用いた 扁桃腺摘出術の麻酔[※]

何も無理して扁桃腺摘出術の麻酔にラリングエルマスクを用いなくてもと、違和感を感じる人も多いかも知れない。実は私もそのように考えていた。しかし、英国のRoyal National Throat, Nose, and Ear Hospitalを見学してから考えを変えた。手術と麻酔は驚くほどに迅速であり丁寧であった。ラリングエルマスクで行われた麻酔と手術に不自然さは全くなかった。7才の子供の扁桃腺摘出術であったが、自然な泣き声で覚醒し、咳ひとつせずにラリングエルマスクは抜去された。扁桃腺摘出術にラリングエルマスクは推奨されるものと確信せざるを得なかった。その後、私の所属する病院で経験してみたところ、結果はやはり納得できるものであった。自分の経験をもとに扁桃腺摘出術とラリングエルマスクについて解説してみたい。

(※ 気管挿管チューブとマスクを合体させたもの)



福留 武朗

ふくとめ・たけろう

1944年、鹿児島県生まれ。68年度、九州大学医学部卒業。鹿児島大学医学部助手、国立療養所福岡東病院麻酔科医長、産業医科大学麻酔科講師などを経て、82年より九州厚生年金病院麻酔科部長。

扁桃腺摘出術とラリングエルマスクの実際

ラリングエルマスク(以下、LMと略す)を扁桃腺摘出術(扁桃摘術)に用いて得られる利点は、気管内挿管に比較して、

- 喉頭を血液等の汚染から保護できる
- 咳を誘発することなく、穏やかに麻酔を終了でき、血圧変動が少ない
- 挿入留置は筋弛緩剤なしで、迅速かつ容易に行える

等である。しかし、欠点あるいは問題点もある。それは、

- 気管内挿管ほどしっかりとした気道確保ではないので、取り扱い次第では気道閉塞が生じ得る。また、誤嚥も生じ得る
- LMはあくまでマスクであり、その他のLMのもつ制約を受ける

等である。

問題点を実験例で示したものが、[P.7表1]である。対象者は扁桃摘術を受けた25人で、アデノイド切除あるいは鼓膜チュービング等も同時に行われている[P.7表2]。

(1) 症例1～9(初期群)は、はじめてLMを扁桃摘術に使用してから9例である。

手術用の開口器を装着した場合の良好な気道確保と、術野の良好な視野の確保が主な問題点となった。馴れない時期に生じる典型的な問題点と思われる。

	初期群 (症例No.1-9)	中期群 (症例No.10-16)	後期群 (症例17以降)
問題点	1. 開口器を装着したときの気道閉塞 2. チューブの口腔内でのたわみによる視野妨害	覚醒時の体動 (課題として、自発呼吸をできるだけ残した麻酔と速やかで静かな覚醒)	現在のところ、懸垂位でのガスリークなど小問題点のみ
解決方法	新型Davis-Crowe開口器の採用 開口器の装着方法の改善 開口器の舌圧子で舌根部を前方上方に圧排 頭部を後傾位にして装着 装着後は開口器の柄を離被架などで挙上し懸垂位を保つ LMのチューブの固定方法の改善 口腔内でたわみの生じないように下顎に固定 頭部後傾位で固定した方がたわみが少ない	フェンタニール0.5-1.0 μ g/kgと サイアミラールで導入 GOSで維持: LMは筋弛緩剤無しで挿入 覚醒時にフェンタニール0.5-1.0 μ g/kg iV 側臥位で刺激せずに静かに覚醒させる。	適応の見極め (巨大扁桃、肥満、長時間手術) などが課題として残る。

表1: 問題点とその解決方法

年 齢	4～9才……………8人	扁桃肥大	1度: 1人
	10～63才……………17人		2度: 22人
			3度: 2人
		手術時間	30～183分 (平均56分)

表2: 患者背景



図1: チューブは下顎に固定する。チューブがたわまないように、頭部後傾位で丁寧に固定するとよい。



図2: 新型のDavis - Croweの開口器。舌圧子の中央にはチューブを捕捉する溝が彫られている。

(A) 開口器でLMのチューブ部分を強く圧迫するので、折れ曲がらないように、チューブ部分が螺旋入りとなっているラリngeルマスクR (Reinforced Laryngeal mask / LMRと略す) を用いた。この製品では閉塞が生じにくいことが知られている。しかし、LMRのチューブはしなやかであるため、マスク部分を下咽頭部まで十分に深く挿入するのはやや難しい。また、挿入時にマスク部分の回転も生じやすく、気道閉塞を生じることもある。

初期群の2例で、開口器装着前には十分な気道が確保されていたものの、装着後に狭窄あるいは閉塞が生じて、



図3: 喉頭鏡による喉頭展開の要領で、開口器の舌圧子で舌根部を前方上方に圧排して開口させるとマスクの位置をずらすことなく装着できる。開口器の柄は離被架などでつり上げて懸垂位を保つ。

1例では挿管せざるを得なかった。いずれの例も、マスク部分が下咽頭腔内に正確に位置していないか、あるいは喉頭部のdown foldingが生じていたことが原因と考えられた。

このような経験の後には、LMをまず盲目的に留置した後に、喉頭鏡を用いて直視下にマスク部分の位置を確認することにした。また、LMでの気道の開通も完全なものであるべきと考え、多少とも狭窄の疑われる場合にはLMの挿入をやり直すこととした。

(B) 開口器の機種選定および装着方法も大切である。LMのチューブ部分は下顎部 (オトガイ部) に粘着テープで固定した (図1)。一方、マスク部分は下咽頭腔に固定されているので、口腔内で弧を描くような形で留置されているチューブの遠位端および近位端とも固定されることになる。従って、開口器の舌圧子で舌根部をチューブとともに圧排するとチューブが口腔内でたわむことになる。この“たわみ”を上手に処理しないと術野の視野が妨げられる。口腔内でチューブ部分をしっかりと保持するには、舌圧子に溝の付いた新型Davis-Croweの開口器 (永島医科器械東京: 図2) がよい。(※)

また、開口器を装着する場合には頭部を後傾位として、チューブ部分を舌圧子の中央に捕捉しながら舌根部を前

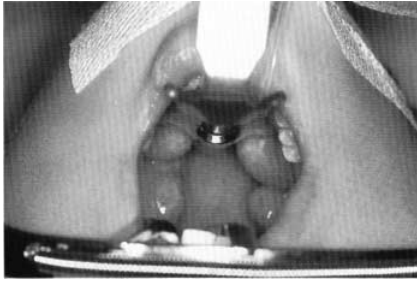


図4：開口器を装着された口腔内の術野。舌圧子の両側に舌根部が見られ、その下方に肥大した扁桃腺が示される。気管内チューブによるものと術野の視野には大差無いことが知られている。

方上方に圧排して開口するとよい。ちょうど、喉頭鏡で喉頭展開を行う要領と考えればよい。装着した開口器の柄は離被架等で挙上して懸垂位を保つようにする(図3)。

以上のような対策で気道および術野の視野は確保されるようになった。術野にはマスク部分は全く見えることはなく、開口器が装着された後には、術者には気管内挿管であるかLMであるかの区別はできないと言われる(図4)。

(2) 症例10-16(中期群)は、術中の自発呼吸の保持と麻酔からの穏やかな覚醒を模索した時期である。

麻酔ガスのリークを防ぐ点からも、自発呼吸を残しておいた方が都合がよい。そこで、麻酔の維持はGOSのみを用いた。前投薬も軽くしており、導入時以降はGOS以外の麻薬等の他薬剤は使用していないので、覚醒時には若い患者ほど暴れる傾向がある。体動が激しいと口腔内の術後の血液などがマスク内部に入り、誤嚥を来す危険性が生じる。

そこで、側臥位とした後に麻酔ガスを切り、フェンタニール0.5-1.0 μ g/Kg ivして静かに覚醒させるようにした。静かに覚醒させることは重要で、決して刺激してはならない。このようにすると、指示に従い開口する状態でも穏やかさを保ち、LMを抜去した後の口腔内の血液も自力で外に排泄するのが普通である。その間、咳は全く見られず、抜去した後のマスク内部の血液の付着は全くないことが多い(図5)。気管内挿管の場合と異なり、喉頭は血液汚染から完全に保護されていることを示している。

その分だけ患者は極めて快適である。また、気管内挿管のような強い刺激がないので、血圧の変化も少なく、口腔内の吸引なども全く行わずに済むので、術後出血の危険性も減少するものと考えられる。ただし、抜去後の頬部に貯留した血液の吸引程度は行っている。また、小児では覚醒時のある程度の啼泣は避けられない。

(3) 症例17以降(後期群)は、基本的な対策はほぼ完成



図5：側臥位にして静かに覚醒させる。指示による開口あるいは嚥下反応などを確認して抜去する。口腔内、気管内の吸引は不要である。抜去したマスク内部には血液の汚染は見られない。口腔内に残された血液は通常は自力排除される。

したと思われる時期である。

症例は少ないものの、手術あるいは麻酔操作に全く問題は生じていない。しかし扁桃腺が深い位置にある症例、肥満症例、長時間手術、巨大扁桃、あるいは幼児などに対しては、検討はいまだ不十分である。今後は適応をしっかりと検討していくべきであろう。

まとめ

LMを扁桃摘術の麻酔に用いると、快適な麻酔中の気道環境が得られることが確認できた。

しかし、そのようなことが成り立つ前提として、

- (1) 麻酔医がLMの取り扱いに習熟していること
 - (2) 耳鼻科医もLMの特性を理解していること
- が必要不可欠である。

未熟な使用方法では危険性が高いことは十分に理解しておくべきである。また、単に、「LMは扁桃摘術の麻酔にも使用できる」と解釈してはならない。LMは気管内挿管に比較して格段に非侵襲的な手技であり、麻酔の質的向上を目指すなら、是非とも扁桃腺摘出術にも試みるべき方法であると確信する。いまだに、LMの十分普及していない本邦の現状では、熟練した麻酔医が開口器の装着などで耳鼻科医をリードしながら使用していくべきであろう。

(※) 溝にチューブが固定されて“たわみ”が生じなくなる。

文献

Williams PJ, Bailey PM

Br. J Anaesth 1993;70:30-3

Comparison of the reinforced laryngeal mask airway and tracheal intubation for adenotonsillectomy

Alexander C.A.

A modified intubating laryngeal mask for ENT and dental anaesthesia

Anaesthesia 1990;45:892-3

ESSAY

感染と人間(連載1)



中田 光

なかた・こう

1954年、東京生まれ。東京大学農学部、京都大学医学部卒業。東芝中央病院内科勤務、米国ニューヨーク大学ベルビュー病院留学などを経て、現在、東京大学医科学研究所微生物保存施設助手。

はじめに

6月に3年間の留学を終えて帰国し、医科学研究所微生物保存施設の助手に就いた。この仕事は、全国の大学や研究所に年間50件ほど、病原細菌を分与する仕事で、それ以外の時間はほとんど自分の研究に費やすことができる。留学前は感染免疫内科の助手で主に感染症の患者を診る立場だったから、臨床から基礎に180度、環境が変わった。

医学部を卒業してから、約半分は臨床にいて、残りも臨床検体を対象にした研究をしながら過ごしてきた。基礎医学のテクノロジーを使って、臨床側の視点から、疾病を研究し、とにかく乖離しがちな基礎医学と臨床医学の境界領域で仕事をしたいと思ってきた。

こうして基礎と臨床の間を行ったり来たりしてきた12年間に寄生虫学教室に在席することができ、結核研究所にいたこともあった。東芝病院では様々な呼吸器感染症に出会い、医科研病院ではエイズやマラリアの患者を診ることができ、ニューヨークのベルビュー病院ではエイズと結核の基礎研究に打ち込むことができた。そして今度は、沢山の病原細菌を扱う立場にいる。

気がついてみたら、私は駆け足で感染症の世界をぐるりと一周してきたような気がする。

「感染と人間」—このテーマからは、感染症と人間の長い闘いという意味を想像する人が多いと思うが、私の頭に浮かぶイメージは何よりも出会った患者さんたち、感染症に携わる研究者、医師たち、そして恩師のことである。

悩み多き時代

20歳の頃、私は悩み多き学生だった。大学の教養課程を終えて農学部に進学したものの将来どのように生きるか、何をなすべきか、具体的なビジョンを持っていなかった。努力すれば、いろいろなことが出来るような気もしたし、何もできないような気もした。自分が空虚で、孤独だった。

子供の頃から研究者になるのが夢で、卒業後は大学院進学を考えていたけれども、一方では、このまま、あまりに細分化された専門の世界に入っていくことにためらいも感じていた。他の多くの学生と同様に科学の進歩に対して懐疑的になっていたのである。水に溶けるはずがないと思われていた有機水銀が実は海の複雑な生態系のなかでプランクトンに取り込まれ、魚の中で濃縮されて水俣病を起こした。人間の生活を豊かにするはずの科学がいたるところで不幸を生み出している事実をどのように理解したらよいのか？

幼稚だったが、私はそれが科学があまりにも細分化され、個々の専門分野がひとり歩きしたために全体として調和がとれなくなったためではないかと漠然と考えた。細分化の一方では、個々の専門分野を統合していく学問が必要ではないか？

「君も寄生虫をやらないかい？」

そんな中で、私はある環境問題ゼミで当時問題になっていた都内の神田川のユスリカ大発生を取り上げた。



写真1：タクロバン市内の風景

レポートをまとめていくうちに、いくつもの疑問が湧いて、当時、病害昆虫の世界で有名だった東大医科研の佐々学先生にレポートと一緒に手紙を送った。

しばらくして、「貴君のレポートは大変おもしろいから、いっぺん遊びにきてください」という葉書が届いて、私は喜び勇んで医科研寄生虫学教室へ出かけた。佐々先生は私の話に耳を傾け、質問に答えてくださった。それから、寄生虫研究部の中を案内してくださり、先生の研究の話をわかりやすく説明されたあと、にこにこしながら、「君も寄生虫をやらないかい？」と言われた。

それから、何回か医科研の寄生虫研究部へ足を運んだ。私は、ますます佐々先生の人柄にひかれ、先生の論文や著書を集めて読んだ。その中で、岩波新書の『風土病との闘い』はすばらしかった。1950年代にまだ日本に多くの風土病が残っていた頃、佐々先生自らの足で患者を発見し対策を考えていった記録で、風土病と闘う患者や医者姿が、実に生き生きと描かれていた。また、佐々先生の研究は、熱帯魚のグッピーを池や川に放って、マラリヤやフィラリアを媒介する蚊の幼虫を退治するプロジェクトなど、専門にとらわれない自由さで機知に富んでおり、生物学全般に基礎をおくものだった。

それまで、医学は全く別世界のものとして無関心だった私だが、読んでいるうちに、医学は疾病を究明し、治療法を見つけるということの他に、細分化された科学の諸分野から人間に有益な方法や知識を吸収し、統合していく学問ではないかと思うようになった。そこには私が長く悩んでいたことへの解答があるような気がした。

医学を学びたい。そして、佐々先生のように意義ある生き方がしたい。しかし、もう大学3年の終わりに近づこ

うとしていた。私は焦った。二カ月間、農学部に近い三畳の下宿部屋で考えた末に、私は聖書の「狭き門より入れ」という言葉を文字どおり実行することを決心した。4月になって4年生に進学すると同時に、医学部受験のために予備校の門をくぐっていた。午前中は予備校へ通い、午後は大学に行って卒業研究のために実験をした。そして、夜は滑り止めのために秋にある大学院入試の準備をした。今から思い出しても何故あんなに一途になれたのかわからない。多分、自分の幼稚さ、若さのせいだろう。

「パンツ一丁残ったらまじなほうだ」

こうして、私は昭和52年春に、大学を卒業すると同時に京都大学医学部に入学した。『風土病との闘い』は依然として私の座右の書で、いつかこの目で風土病を見てみたいと思っていた。

そのチャンスは意外にも医者になる前にめぐって来た。5回生になり、公衆衛生の講義が始まると、環境医学レポートというのを課せられた。半年間かけて公衆衛生に関する好きなテーマを選んで調べ、レポートを書けというものだった。私は、風土病についてレポートが書けないかと再び東大医科研の寄生虫学教室に手紙を書いた。教授は田中寛先生に代替わりしていたが、先生は親切に相談に応じてくださり、フィリピン、レイテ島の日本住血吸虫研究所に行きなさいと同教室の松田肇先生と筑波大学教授の安羅岡先生をご紹介くださった。当時、医科研と筑波大学の寄生虫学教室はフィリピンにフィールドを持っており、教室をあげて現地の人を送っていた。

(次ページに続く)



写真2：パロの日本住血吸虫研究所



写真3：パロ川に架かる鉄橋 向うに見えるのが十字架山

マニラに着いたのは夜の10時半を回っていた。税関手続きを済ませてホテルに向かうべくゲートに出た私は、周囲の異様さに立ちすくんでしまった。ゲートを取り囲んだ黒山の人だかり。みんな何か口々に叫んでいる。あとでわかったのだが、荷物を運んでチップを貰うもの、ポンビキの類い、あるいはシロタクの客引きだった。私が途方に暮れていると人込みの中から、「君、中田くん?」と呼ぶ声がした。安羅岡先生だった。

周囲を威嚇するようににらみつけながら、安羅岡先生は私を20メートルぐらい先に駐車してあった車に案内してくださった。そこには、マニラ在住で当時サンラザロホスピタルおごぬきの院長をされていた越後貫先生ご夫妻が待っておられた。車に乗ると、越後貫先生は一言、「君ね、こんなに遅い時間にひとりで来るなんて、パンツ一丁残ったらまじなほうだ」と仰られた。

パロの日本住血吸虫研究所

次の朝、先生に護送されるように空港に着いた私は、レイテ島の首都タクロバンへと向かった。

タクロバンはマニラとは違って、のどかな港町である(P.10写真1)。空港には市立甲府病院の林先生が迎えに来てくださっていた。先生は、神経内科が専門で、レイテには住血吸虫卵が脳血管内に栓塞を起こすことによる脳日本住血吸虫症を調査するために来られていた。林先生のご配慮で、それから2週間、タクロバンで唯一のホテルに滞在して毎日パロの日本住血吸虫研究所へ通うこととなった。

パロはタクロバンから、南へ12キロのところにある小さな町で、ホテルからフィリピンではお馴染みのジブニーと呼ばれる乗り合いタクシーに乗って通った。パロには17世紀にイエズス会の宣教師が建てた教会があり、日本住血吸虫研究所はそこからさらに南に200メートル下ったところにあった(写真2)。

レイテ島について語るとき、やはり大太平洋戦争を抜きにはできない。戦争末期、レイテには7万5千人の日本軍守備隊がいたが、昭和19年10月の米軍の上陸以降、6万5千人が戦死している(といっても、多くは餓死や病死、あるいは、現地人の襲撃にあって、命を落としたのだという)。パロもマッカーサーの上陸地点に近かったため、有数の激戦地であった。上陸後、米軍はこの教会に本部をおいて、すぐ北にある十字架山に攻撃をしかけた。標高160メートルくらいの丘だが、中部のカリガラ平原に抜ける重要な戦略的拠点だった。米軍はレイテ湾から山の形が変わるほど、激しく艦砲射撃を加え、日本軍も必死で防戦した。3日間の激戦の末、3000人の日本軍戦死者が出たという。

ところで、この十字架山と教会の間には、パロ川という小さな川が流れているが、周囲は深い谷になっていて、米軍は渡河のために橋を架ける必要があった(写真3)。彼らに風土病に対する予備知識があったのだろうか?工事の後、多数の住血吸虫感染者がでた。半年間にレイテだけで1700名もの米軍兵士が患者と診断されたという。戦後、そのことを重く見たWHO(世界保健機関)とフィリピン政府はこの地に住血吸虫コントロールパイロットプロジェクトを設立した。私が訪れた昭和57年頃までには国際協力事業団の援助で、付属病院も建てられ、スタッフも充実していた。私は、スタッフに連れられてジャングルにジープで入り、流行地を見学して回ることができた。その記録については次号に記述したい。(つづく)

日本住血吸虫症

フィリピン、中国、インドネシアなどアジア地域に広く分布し、感染者は5000万人に達する。わが国でもかつては甲府盆地、広島、千葉などで見られた。成虫は8~19mm、雌虫は22mmぐらいで、雌雄抱合した虫体が門脈系に棲み、産卵するため、肝臓、腸などに虫卵が栓塞する。卵周囲は次第に肉芽腫となり、肝硬変と脾腫を起こすようになる。

感染はミヤイリ貝(中間宿主)から水中に出たケルカリア(セルカリア)が経皮的に侵入することによって起こる。

FAITH

キリスト教と仏教の共通の根拠(3)

一禅者からキリスト教徒への提言

スイス・ツークで開催された第1回キリスト教・仏教
対話集会における講演(1994年7月)より抜粋



秋月龍氓

あきづき・りょうみん

1921年、宮崎市生まれ。東京大学文学部哲学科卒業。同大学院修了。
花園大学教授・埼玉医科大学名誉教授・禅僧。

著書に、『秋月龍氓著作集』全15巻、『道元入門』『公案—実践的禅入門』『禅門の異流—休・正三・盤珪・良寛』『禅仏教とは何か』『世界の禅者—鈴木大拙の生涯』『正法眼蔵を読む』『新大乘—仏教のポストモダン』など多数。共著に八木誠一博士との宗教哲学討論集『親鸞とパウロ』『禅とイエス・キリスト』『ダンマが露わになるとき』など。

《これまで》

いまから30年前、第二次バチカン公会議で「教会再一致」と「諸宗教の対話」が決議された。以来、キリスト教と仏教の思想的な対話、東西霊性交流が真剣に進められて来た。

私は青年時代に洗礼を受け、その後世界の禅者鈴木大拙に教えを受けて禅匠(ゼン・マイステル)となったが、最近、キリスト教と仏教には何か共通の根拠があることが見えるようになった。それを語りたい。

承前(三)

ここで特に滝沢の「不可逆」という説が問題となった。まず阿部正雄が「不可逆」はキリスト教のことで、仏教は「可逆」だと主張し、本多正昭は「可逆即不可逆」を提唱し、八木誠一もこれに賛同した。しかし私は滝沢説をそのまま受け入れた。(『仏教とキリスト教—滝沢克己との対話を求めて—』三一書房1981年刊)。私は滝沢発言の不可分と不可同だけは認めるが、不可逆は認めないというような受け取り方を許さないもので、私がよく使う言葉で言えば、「一息に不可分・不可同・不可逆」として賛否を迫るものだと思うからである。それは、いわゆる分別論理の整合性だけで理詰めを読むと、滝沢の真意を見誤ると思うからである。私はいつしかそう思うようになった。文章にも、いわゆるカント型とヘーゲル型というような論理の型があるように思う。

以上のように、私は仏教徒だが、宗教の極致は聖書にいうインマヌエル(神、我らとともに存す)ということだと思う。ただし私は神は我々人間とは区別はできる(不可同)が、切り離すことはできない(不可分)ものだと思う。だから初めに神があって、天地を造り、人間を造った、そして世界の終わりに人間を裁くというような神を認めない。神は常に、即今・此処に、我らとともに存すのである。

そのことを禅匠黄檗は、仏も衆生もない、あるのは「一心」だけだという。仏(超個)というものと、衆生(個)というものと、迷った人間が描いた「相」にしかすぎないということである。神と人とは区別はできるが切り離すことはできない。不可分にして不可同である。神が先で人は後で、その間

FAITH

の秩序は絶対に逆にはできない。これを不可逆という。キリスト教神学者滝沢克己は、これがインマヌエルという人間実存の原事実だと言った。私は仏教徒として滝沢のこの宗教哲学に深く共鳴した。

(四)

では、そうした「インマヌエル」―「神＝人」ないし「生仏一如」なる原事実は、いつどこで露わになるのか。黄檗は、先に言った「一心」をのちに「無心の心」と改めて言い直す。

聖パウロは、「キリストとともに十字架に死んで、キリストとともに復活する」という。そして、「もはや私は生きていない。キリストが私のうちに生きる」という。「死・復活」である。私はこれを宗教哲学的に、「自我(エゴ)に死んで自己(セルフ)に生きる」と言う。

パウロのいう「うちなるキリスト」こそ、パウロにとって「本来の自己」であった。キリストとともに死んでキリストとともに復活してこそ、パウロは自己の真の主体性を確立できたのである。禪者はこれを、この肉体のなかに生きて働く「無位の真人」という。そして、先の「インマヌエル」の事実を「法」の語で表し、「法が露わになる時」を大事にする。

では、法はいつ露わになるか。無我のときにのみ、法が露わになるのである。

それはまた、どこでかと重ねて問いたい。それは「坐禅」においてである。「坐禅」とは、「無我」の現成の場所であるからである。

かつてラサール神父は、「自分は神と一体になりたい。その神人合一の境地を得る方法論がカトリックの伝統では十全ではない。そのために、自分は仏教の坐禅にその神人合一の方法を学ぶのだ」といった。インドの正統宗教であるヒンドウイズムの最高思想は「梵我一如」説だと言われる。これは自我原理であるアートマン(我)が、宇宙原理であるブラフマン(梵)に帰一するという、一種の神人合一論である。

ほとんどの仏教学者が、仏教の悟り(法が露わになる

自覚)をヒンドウ伝来の「梵我一如」論の線上で解釈するが、私はその学説には厳しく反対である。それは私は「法は無我のときに露わになる」のであって、ひっきょう「自我が大我になる」という「梵我一如」説とは、有我と無我と、方法がまったく逆であると考えからである。「仏法には無我にて候」である。

さて、坐禅は悟りへの手段ではない。真の坐禅は無我の現成である。いわゆる絶対無の現成である。キリスト教に「神を見た者は死ぬ」という語があると聞く。そうした神(絶対無)が私において露わになる体験が坐禅である。坐禅において、我々の自我は絶対的に否定される。自我の死、そしてその死による真の「本来の自己」としての復活の経験が、見性(心眼を開いて自己の仏性を徹見する＝悟り)である。坐禅というが、それは何も「坐る」ことだけに限らない。伝統仏教語で言えば、禪定である。インドにおける禪定は「持戒・禪定・智慧」という三学の三分の一の禪定であるが、中国禅では「定慧一等・禪戒一如」で、いわば一分の一の禪である。だから、真の坐禅は、自我(エゴ)の死による自我(セルフ)の大活でなければならない。それはインマヌエルの現成である。そこではじめて我々は一息の「神＝人」(無位の真人＝仏陀)となる。

先の神人(真人)を、哲学者滝沢克己はインマヌエルに、第一義のそれと第二義のそれを区別した。

第一義のインマヌエルは、すべての人の実存の根底に見られる恵みである。仏教者はこれを本覚門という。みずから自覚しようとすまいと、衆生は本来仏である。だが、衆生は通常この本来の事実を目覚めていない。

第二義のインマヌエルは、その本来底の自覚であり、現成である。仏教徒はこれを始覚門という。

イエス・キリストは、この第二義のインマヌエルの人間における典型的な実現である。道元のいう「本証の妙修」である。

滝沢におけるこの第一義と第二義の区別と統合の自覚はすばらしい。ただし、これまでのキリスト教は、これまでこの二つのインマヌエルの区別をイエスについて明析

に遂行しなかった。イエスは第二義の典型的に成就したひとりの人間なのに、イエスを第一義そのものと考えた。キリスト教の中で滝沢一人が初めてその誤りを脱し得た。

ともあれ、第一義のイマヌエルという本来底の「神＝人」という、人間実存の本分に随ってこそ、宗教的に「恥を知る」ということが実現できるのである。「神、我らとともに在ます」という生仏一如という本分に照らすときに初めて、人間は罪を知るのである。仏教徒のいう懺悔ということが、ここで真に実現できる。

悟りとはなにか。自我(エゴ)の否定による自己(セルフ)の肯定だと言った。自我がないとき、不思議にすべてが

自己となる。仏教徒はこの体験を「物我一如」といい「自他不二」という。だから、汝の痛みが、即、私の痛みとなつて、智慧がそのまま慈悲として働くのである。それはキリスト教徒が、「愛する者は神を知る。愛は神から出る」というのと、まったく一つである。

私はかつて、ドイツのザンクト・オッチリーエンのベネジクト大修道院を訪ねたとき、「初めに大悲があった」と言った。ヴォルフ院長は、すかさず「おおカルナー、そこであなたと私は一つになりました」と応じてくれた。仏教にいう「カルナー」はキリスト教にいう「アガペー」である。私はここに、仏教とキリスト教の共通の根拠があると信じる。(続く)



▲東京国際空港にて、ツアー参加者たち



▲トゥーランドットの舞台

トゥーランドット “TURANDOT” オペラ北京初公演 観劇ツアーに出発!

イタリアの作曲家プッチーニの名作歌劇「トゥーランドット」が、このほど北京の世紀劇場で開催された。

本誌は前号Vol.1.17でこのオペラへのご招待ツアーを募集したが、懸賞当選者5名ならびに参加者5名は、

11月15日東京国際空港を出発した。北京ツアー一行は16日の初演とレセプションパーティーに参加。さらに万里の長城、紫禁城見学など、思い思いの休日をごした。

LE MECENAT

LOVE

矢崎 節夫

やざき・せつお

1947年、東京生まれ。早稲田大学英文科在学中より、詩人まどみちお氏に師事し『チャイルドブック』、『キンダーブック』などに作品を発表。童話集『ほしとそらのしたで』で第12回赤い鳥文学賞を、『金子みすゞ全集』で第8回日本児童文学学会特別賞を受賞。著書に『二十七ばん目のほこ』、『ひとりでもふたり』など多数。



金子みすゞの世界

“みすゞさん”と今、やさしい響きで呼ばれている童謡詩人がいます。

金子みすゞがその人です。

実は金子みすゞに直接出会えた人は、もう数名しかいないのです。それなのに、今でも生きているように、一番大切な人を呼ぶように、“みすゞ”さんと多くの人が呼んでいるのです。それは、もうだれもがやさしくなっているからでしょう。そして、みすゞの作品を読むと、だれのこころも、明るい方へ、うれしい方へ、やさしい方へとコトコトと動き始めるからでしょう。

“幻の童謡詩人”

金子みすゞは、今から70年ほど前の大正から昭和にかけての日本の童謡の隆盛期に、彗星のように現われ、詩人の西條八十に「若き童謡詩人中の巨星」といわれ、日本中の文学少年少女のあこがれの星でしたが、昭和5年3月10日、26才の若さで愛児を一人残し、この世を去りました。

以後、多くのみすゞ探しにもかかわらず、長い間隠れたまま“幻の童謡詩人”といわれてきました。

私が金子みすゞとその作品を初めて知ったのは、大学一年の時読んだ『日本童謡集』（岩波文庫）の中ででした。「大漁」という作品が一篇載っていたのです。

〈大漁〉

朝焼小焼だ
大漁だ
大羽鱈の大漁だ

浜は祭りのやうだけど
海のなかでは
何万の
鱈のとむらい
するだろう。

この作品を読んだ時、激しい衝撃を受けました。人間中心の目の位置をひっくり返される、深い、やさしい、



（JULA出版局提供）

鮮烈さでした。金子みすゞの作品をもっと読みたい。金子みすゞとはどんな人なのだろうか。

この日から、私のみすゞ探しの旅は始まりました。そして16年後—昭和57年、実弟に辿りつき、みすゞが残した手書きの童謡集3冊があることが分かり、昭和59年、『金子みすゞ全集』（全512篇）を出版、以後、60篇の選集『わたしと小鳥とすずと』、『明るいほうへ』、童謡絵本『ほしとたんぼ』、評伝『金子みすゞの生涯』と、JULA出版局より次々と出版、60年をへてみすゞ甦りがおこなわれたのです。

みすゞ世界の広がり

この十年で、みすゞの出版物は50万部を越え、驚くような速さで広がっています。来年の小学校の国語4社にも「わたしと小鳥とすずと」や「ふしぎ」などが載り、日本中の小学生もみすゞに出会います。この広がりは、最近流行の“地球にやさしい”という人間中心の傲慢さとは対局にある、みすゞの作品の底に流れているものの見方、やさしさが、人々の心をとらえているからでしょう。

又、物質中心、人間中心の殺伐とした20世紀の中で、人々のこころが傷つき、疲れはて、ようやく新しい世紀にむけて、人としての本来の姿にもどりたい、とだれもが切実に思い始めたからでしょう。

なによりもうれしいのは、みすゞの童謡は三代が共有できる、きわめてまれな文学世界だということです。幼児でも分かる童謡という文学形式の中で、人としての大切なことをたくさん気づかせてくれます。みすゞの作品は、読み手の人生観、宗教観、宇宙観、の深まりにつれて、どんなにも深く、楽しく読めます。

LOVE

いのちということ

『大漁』を読むことで、今、最初の驚きから、こんなふうに考えることができるようになりました。

私たちの食卓にのぼる、魚も肉も、米も野菜も、みんな生きていたいいのちです。そのいのちを食べることによって、私たちは生きているのではなくて、生かされているということ。つまり、私たちのいのちを生かすためには、他の弱いいのちを食べなければ生きられないということ。だからこそ、私たちをおつくりになった、宇宙、あるいはだれかさんは、変わってきたいのちを悲しませないように、日々こころ豊かに生きなさいと教えてくれている、そんな気がします。更に、いのち年ということも考えます。私は48才ですから、いのち年は40億48才です。みなさんも、いのち年は年令プラス40億年です。なぜなら、45億年前に地球ができ、40億年前に、地球にいのちが生まれ、そのいのちをずっと受け継いで、今、人としてこの世にいるからです。この40億年の間には、木だったことも、花だったことも、魚だったことも、鳥だったこともあるのです。

私はコスモスが大好きですが、それはきっと、以前、私はコスモスだったことがあるからでしょう。好きだと思うのは、昔、その花だったからかもしれません。そう思うと、まわりの全てが、いとおしくなります。

見えぬけれどもある

〈積った雪〉

上の雪
さむかろな。
つめたい月がさしていて。

下の雪
重かろな。
何百人ものせていて。

中の雪
さみしかろな。
空も地面もみえないで。

今まで私たちは、中の雪を見たことがあったでしょうか。中の雪の存在に立ち止まったことがあったでしょうか。私たちはいつも、目立つもの、目に見える世界ばかりを、見てきたのではないのでしょうか。みずさんは「ほしとたんぽぽ」で“見えぬけれどもあるんだよ、／見えぬものでもあるんだよ”とうたっています。目に見えるものは、見えないとあぶないから見えるのです。机でもコップでも、

車でも、みんな。しかし目に見えない、空気や人を愛するところは、やさしいものだから、見えないのです。大切なものは、やさしいものだから目に見えない、そう気づく人でありたいものです

〈花のたましい〉

散ったお花のたましいは、
み佛さまの花ぞのに、
ひとつ残らずうまれるの。

だって、お花はやさしくて、
おてんとさまが呼ぶときに、
ぱっとひらいて、ほほえんで、
蝶々にあまい密をやり、
人にや匂いをみなくれて、

風がおいでとよぶときに、
やはりすなほについてゆき、

なきからさへも、ままごとの
御飯になってくれるから。

このうたを読むと、完全に生きるということのすばらしさに気づきます。花はなんてやさしいのでしょうか。なきからさへも、ままごとの御飯になってくれるのです。

私たちは自分の最後の一瞬を、愛する人たちにかこまれて、この世を去りたいと思います。数日間のいのちなら、医師は痛みさえ取ってくればいいのです。愛する家族と共に時間を過ごし、みんなに体をなでさすられたり、手をにぎられたりしながら、いのちを終わらせたいと願っています。それには、病院に、家族と最後を過ごせる部屋があるべきです。医師は治る病気を治す人であって、人のいのちの最後を、隔離する権利はないのです。医学は進歩しましたが、それだけいのちの尊厳を忘れてきたように思えます。大切ないのちです。

私たちが死ぬのは、愛する子孫と生存競争をしないためです。

みずさんで宇宙を語る宇宙物理学者佐治晴夫さんの言葉です。

※作品は『金子みずみ全集』（JULA出版局）より、新漢字・新かなづかいに改めています

◆金子みずみ童謡集『わたしと小鳥とすずと』『明るいほうへ』（矢崎節夫編）を10名様にさしあげます。ご希望の方は添付の葉書でお申し込み下さい。

HOPE

ブルゴーニュ
ゆかりの人々

コレット Sidonie Gabrielle Colette 森と土の匂い、パリの頹廃、男と女

ブルゴーニュを愛した作家たち(1)

島野 盛郎

しまの・もりお

1932年生まれ。早稲田大学第一文学部仏文科卒業。54年、ダイヤモンド社入社。雑誌記者、出版局デスク等を勤め、現在、フリーライター、「伝記研究会」幹事。主な著書に『夢の中に君がいる―越路吹雪物語』（白水社）、『食を創造した男たち』（ダイヤモンド社）、などがある。

ブルゴーニュ出身の作家たちの、横溢する感受性と強烈な個性の源には、深く豊かな自然への尽きせぬ愛着がある。

『ジャン・クリストフ』などでノーベル文学賞を得たロマン・ロラン、映画にもなった『青い麦』で日本人にも馴染み深いコレット、19世紀初頭のロマン派詩人、ラ・マルチーヌ……。ブルゴーニュに生まれ育ち、あるいは長期逗留し、そして終^{つい}の住^す処として、ブルゴーニュを愛し、ロマンを育んだ作家たちの足跡を辿ってみよう。

第1回は、今世紀前半の女流作家で、田舎の土の匂いをもちながら、パリの頹廃と男女の愛欲の機微をみずみずしいタッチで描き続けたコレットを紹介する。



▲コレットが生涯こよなく愛した生家
(ヨンヌ県サン=ソヴール=アン=ビュイゼ)

森を駆け回った少女

シドニー・ガブリエル・コレット (Sidonie Gabrielle Colette) は、1873年、パリの南東約180キロのブルゴーニュ地方のSt. Sauveur-en-puisayeという小さな町に生まれた。ワインで名高いブルゴーニュであるが、この町をとりまくのは、ぶどう畑でなく美しい森であった。明るい灌木林もあれば、巨木のそびえる森もある。清い泉がわき出している池、草っ原もある。少女時代のコレットはこの森を駆け回って過ごした。のちに自然の

美しさに対する感受性、動植物への鋭い観察眼は並ぶものがないといわれた才能は、この環境で培われたものである。後年、パリに暮らすようになってからも、故郷や自然への愛着は消えることがなかった。処女作『学校のクロディーヌ』(27歳)の冒頭で故郷を次のように描写している。

「親愛なる森よ!わたしはそれらの森という森をことごとく知っている。実際よく歩き回ったものだもの。灌木林があつて、そこをあなたが通ると小枝があなたの顔に意地悪くはねかえってきたりする。灌木林には太陽の光線がいっぱいさしこみ、苺や鈴蘭がところ狭しと賑わっている。それにまた蛇もよく見かける。あのなめらかで冷たい、見るも怖ろしい小さな身体がわたしの足もとをすべるように匍^はつてゆくのをみると、わたしは息のつまるような恐怖に身も震える思いだった<中略>。それに樅^はの林だ!それは鬱蒼^{ふさふさ}としてもいなければ、神秘的でもないが、その匂い、下に向かって生い茂るバラ色やスミレ色のヒース、それに風に吹かれてたてる歌の調べのようなざわめき、そうしたもののゆえにわたしはその林を愛する。

そこへ辿りつく前にぎっしり重なった大樹林を通らなければならぬのだが、突然、豁然^{かつぜん}としてとある池のふちに抜け出られて、なんとも言えないすばらしい驚きを感じる

のだ。その池は水面がなめらかで底深く、周囲をすべて森で囲まれていて、なんと地上のいっさいのものから遠ざかっていることだろう！その池の真中に縦の木々が島の形で生い茂っている。池を渡るには兩岸にかけてある根こそぎ抜かれた一本の幹の上を馬で勇敢に渡らなければならない。

縦の木のうでよく火を起こす。夏でさそうするのだ。それもただそうすることが禁じられているからにはかならない。そこでリングでござい、梨でござい、畠から盗んできたジャガイモでござい、

それから何も無いときには黒パンだとかとにかくなんでもかまわず焼くのだ。すると苦い煙と樹脂が匂ってきて胸が苦しくなるような思いがするが、それはまた同時になんとも言えない快い気持なのだ。

わたしはこれらの森で10年間、夢中になってほっつき歩いたり、征服や発見を試みたりして生きてきた。そんなわけだから、いよいよそこを離れなければならない日きたら、わたしは堪えがたい悲しみにおそわれることだろう……」（川口博訳、二見書房刊『コレット著作集I』より）

スキャンダル、そして名声

コレットは深く故郷を愛していたのだが、別れは17歳になったとき、突然やってきた。父親の財産管理の失敗のために一家は破産し、生家は競売に出されてしまった。コレットは泣く泣く故郷から追放されたのである。

20歳でジャーナリストのウィリー（本名アンドレ・ゴーチエ・ヴィエール）と結婚、パリに出る。ウィリーは好色でけちな男であったが、コレットに小説を書くように勧めた。1900年、『学校のクロディーヌ』を夫の名前で発表、好評を得た。その後、クロディーヌものをいくつも発表した。結婚生活はうまくゆかず、1906年に離婚した。そこで生活のため、コレットはミュージックホールの踊り子となり、旅興行にも参加した。1910年、『ル・マタン』紙の文芸記者となる。2年後、編集長のアンリ・ド・ジュヴネルと再婚、第一次世界大戦中は報道記者として活躍した。

コレットの作家生活は第一次大戦後に本格的なものとなる。年上の娼婦と美少年の愛欲を描いた『シェリ』（1920）は文壇の注目を浴び、アンドレ・ジイドの絶賛を受ける。また少年と少女の微妙な性の芽ばえを扱った『青い麦』



▲1953年5月

（1923）、『シェリの最後』（1926）、『夜明け』（1928）、『第二の女』（1929）、『牝猫』（1933）などを発表、女流作家の地位を不動のものとした。

だが、2度目の結婚もうまくゆかず、12年後に離婚した（51歳）。その後、小説を発表するかたわら、舞台女優としても活躍する。出世作の『シンド』を戯曲化し、主演女優として各地を巡演、人気を集めた。1925年、若きビジネスマンで、のちにジャーナリストに転じたモーリス・グードケと出会い、恋をする。61歳で3度目の結婚、二人は彼女が

死ぬまで別れることはなかった。

第二次大戦中も戦後も、若々しい好奇心と勇気を失わず、パリのパレ・ロワイヤルのアパートマンで『私の窓から』（1942）、『宵の明星』（1946）、『青い灯』（1949）などの傑作を発表した。コレットの小説の主なテーマは男女の微妙な愛憎のドラマである。最後まで感覚的なタッチでみずみずしく描くことができたのは、故郷の自然への尽きせぬ愛着のせいであろうと言われている。

1954年8月3日の夜、老衰のため、パレ・ロワイヤルの自宅のベッドで死去。81歳であった。死のニュースが伝わって2時間後には1万人ものパリ市民が、彼女に別れを告げるためパレ・ロワイヤル広場に列をつくった。8月8日、国民葬が同広場で盛大にとり行われた。墓地はパリのペール・ラシェーズ。墓碑名には（ここにコレット休む。1873—1954）とだけ書かれている。

Château de Chailly

シャトー・ドゥ・シャイイ

中世がいまだに息づいているブルゴーニュにいらっしやいませんか？数々の銘酒を生み出すぶどう畑、グルメレストランの数々、中世そのままの街並、美しく広がる大地や小さな村々、豊かな生命力と「はだのぬくもり」を感じる地方、それがブルゴーニュです。

お問い合わせは（株）佐多商会ブルゴーニュ事業部へどうぞ

TEL:03-5762-3010 担当:岩沢、村山

